

立命館大学理工学部 正会員 笹谷 康之

立命館大学理工学部 学生員 ○高見 摂

1. はじめに

琵琶湖の周囲を鈴鹿・比良・伊吹などの山々に囲まれた近江盆地の平野部にそびえる三上山はすそ野が美しいカーブを描いて広がり、標高 432m と高い山ではないが、滋賀県全域からのぞむことができ、近江富士とよぶにふさわしい霊峰である。

既存研究においても、三上山を取り上げているものが見られるが、研究の中の一部として山体の透視形態についてのみふれられる程度にとどまっている。

そこで本研究は、三上山の眺望景観に論点を置き、透視形態だけでなく、独自に選定した視点場を用い、魅力ある三上山の眺望景観の提示や、現状の問題点の把握などを行ない、風景計画への示唆を行なう事を目的とする。

2. 研究の手法

三上山の可視領域を求め、写真・現地調査・文献から主要な眺望点を抽出し、視点場の選定を行なう。(現代の視点場①三上山周辺主要道路、②写真集『近江富士遊々』1) 歴史的視点場①小・中学校校歌、②古墳) 設定した現代の視点場に関しては、魅力ある眺望体系の類型化、提示などを行ない、歴史的視点場からは現状と当時の様子を比較し、考察を行なう。

3. 三上山の認知性

三上山の可視領域は滋賀県のみにとどまらず、他県にまで広がる。(図1)

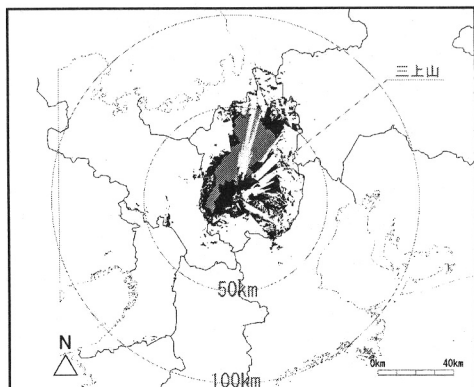


図1 三上山可視領域図

また、その山容に着目すると、三上山北東―南西にかけては、山頂にコブを二つ確認する事ができ、三上山南東―南西にかけては、なだらかな山頂を確認する事ができる。加えて、近江富士と呼ばれながらも、雄山(473m)、雌山(272m)を有す、双耳峰である。このことに注目し、本研究では三上山を 360 度の視点からのぞみ、山体の透視形態を 7 タイプに整理した。(図 2)その後、それぞれの透視形態が認識できる地域を検証した。(図 3, 4)

これらのことより、三上山は様々な方位、遠隔地からも、表情豊かな山容を確認することができ、他の山とは異なった異質な存在感を有していることが分かる。

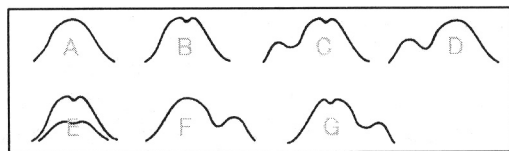


図2 山体の透視形態

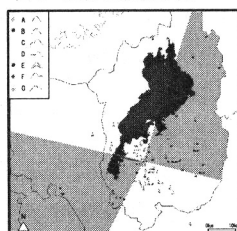


図3 コブが確認できるエリア

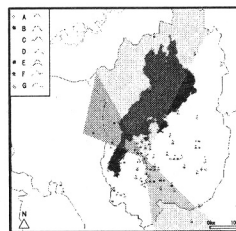


図4 なだらかなエリア

4. 現代の視点場

① 三上山周辺主要道路



写真5 名神高速道路 三上山周辺の主要道路である国道1号線、国道8号線、名神高速道路(写真5)は、その軸線上に三上山がある。また、その他にも旧東海道や琵琶湖大橋、鉄道など、三上山を山アテの対象とし、シークエンス景観を楽しむことができる視点場は数多くある。しかしこのような視点場は、遠方の山と街路空間の間に山を隠蔽するような構造物が存在すると、成り立たない。都市内に垂直に立ち上がる構造物が増加する近代以降ではその達成は難しい場合が多い。三上山を取り巻く主要道路周辺の構造物建設に対しても、今後より一層の配慮が必要である。

② 写真集『近江富士遊々』

写真集『近江富士遊々』の中でよく見られる眺望景観を7タイプに整理し、三上山を取り巻く美しい自然が織りなす眺望景観の提示を行なった。これらを体験できる眺望圏は様々な阻害要因によって徐々に失われている。(図6)次の世代に残していくためにもこういった自然景観を見直す必要がある。

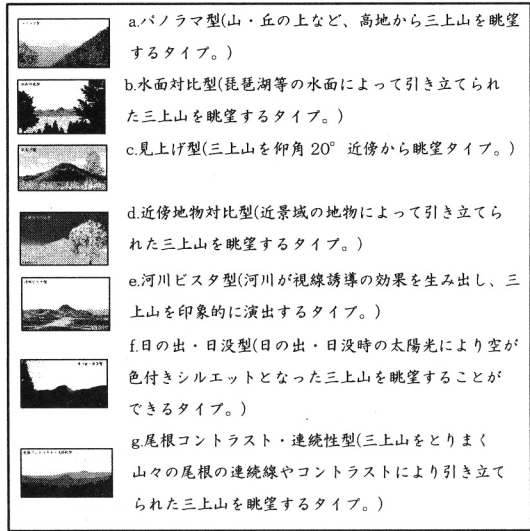


図6 写真集『近江富士遊々』類型結果

5. 歴史的視点場

① 小・中学校校歌

学校の立地位置による三上山の認識の違いや、歴史の変遷を探ることを目的として、滋賀県の公立の小・中学校から三上山が歌われている校歌(全18校)を抽出し、それぞれの学校を視点場として定める。

調査を行なった結果、校歌の中に謳われているような風土豊かな三上山をのぞむことができなくなっていることが分かった。特に守山小学校はその顕著な例で、近江富士という歌詞が謳われながらも、校舎の最上階からわずかに山頂が見える程度にとどまっている。(図7)これは学校周辺に高層建築が立ち並んでいるため、中には13階を越えるマンションも見られる。高層建築を建設する際には、校歌のような地域性の強い要素も取り入れ、その地域の風土を保全することが必要である。

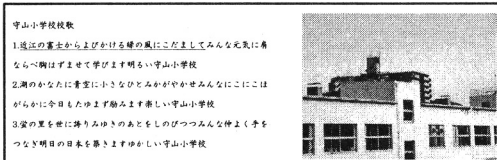


図7 守山小学校

② 古墳

三上山周辺に古墳が多数分布していることに着目し、現地調査やCGによる当時の景観復元などをおこない、古代の三上山への視点を確認した。

その結果、障害物も無く直線上にあり、三上山を印象的にのぞむことができる古墳(写真8)と、見えかくれが頻繁に起こる場所にあり、期待感を持ちながら三上山をのぞむことができる古墳(写真9)があることが分かった。

三上山周辺は地形構造が多様様であり、このような地形構造を利用した三上山の眺望圏の確保にも目を向ける必要がある。



写真8 塚の本古墳群



写真9 甲山古墳

5. おわりに

本研究で得られた知見は以下の通りである。
①三上山の山体の透視形態を7タイプに類型化し、視点場位置によるその見え方の違いを明らかにした。
②三上山周辺の主要道路を、三上山をビスタ景とした豊かなシーケンス景観を体験できる視点場とし、その重要性を示唆した。
③写真集『近江富士遊々』より、魅力ある三上山の眺望景観(主として自然景観)を、7タイプに類型化することができた。
④小・中学校校歌と各学校立地位置の現地調査から、校歌の中に謳われているような風土豊かな三上山をのぞむことができなくなっていることが明らかになった。
⑤三上山周辺の古墳立地位置から、地形上の特徴を活かした三上山の見せ方の工夫があることが明らかになった。

滋賀県が定める風景条例では、湖国のシンボルである、琵琶湖に中心的な位置付けをおこない、それを取り巻く景観回廊作りを行なっているが、以上のことを踏まえながら、三上山の眺望に中心的な位置付けを行なってみることも検討してみてもどうか。

そのためには、今後さらなる魅力ある視点場の確保をおこない、価値ある眺望景観としての人々の認識を共有するとともに、眺望保全対策の具体的な手法を確立することが今後の課題になってくる。

参考文献 1) 近江富士遊々 八田正文 2000